

がんばれ知的障害もつ牧童たち 活気みなぎる奈良市の「植村牧場」

本誌編集委員 読売新聞特別編集委員 小谷直道



JR奈良駅から北東に約四キロの住宅地。京都に至る街道沿いの植村牧場は、コスモスの咲く寺として知られる般若寺の真向かいにある。

般若寺は飛鳥時代に高句麗の僧・慧灌えかんによって開かれ、のちに聖武天皇が鬼門鎮護のために堂塔を建立したと伝えられる。寺を訪れる観光客は、町の中にある約六、〇〇〇平方メートルの植村牧場でひと休みして、名物の濃厚なソフトクリームを食べていく。

ただ、このソフトクリームの原料となる牛乳は、知的障害者たちが世話をしている乳牛から、彼ら自身がしぼったものであることを知る観光客は、さほど多くはない。

植村牧場は、創業百二十年になる古い牧場だ。四代目牧場主の黒瀬礼子さん（52）を中心に、従業員二〇人が働いているが、このうち一三人が知的障害者である。また、牧場には通所の福祉作業所（小規模作業所）が併設されていて、このうち三人はここから派遣されている。奈良県では、植村牧場は障害者雇用の優等生企業として知られている。

できないと叱るより
得意技を見つけよう

植村牧場の朝は早い。午前四時半、住み込みの従業員は牧場の一角にある宿舎

植村牧場株式会社

〒630-8102 奈良県奈良市般若寺町168番地
TEL・FAX 0742-23-2125

を起き出し、牛舎にいる三五頭の乳牛のふんをかき出す作業が始まる。日本で狂牛病(BSE)が発生して以来、すべての牛に耳票が付けられている。

従業員たちは、敷きつめたおがくずに混ざった牛ふんをスコップで一輪車に積んで運び出す。牛ふんは有機栽培用肥料として農家の間で引っぱりだこだ。農家からはお札に有機野菜が届けられる。牛に野菜を与えると喜ぶのだが、乳成分が微妙に変わるので、これらは従業員の食事に供される。

「ヒデキ君」こと田中秀紀さん(34)たちは、搾乳中に牛のしつぽが乳房やしぼった牛乳に触れないように、ひもで固定する。一方、「キミちゃん」こと吉村公嘉さん(31)たちは、お湯でぬらしたタオルで牛の乳房を丁寧にふく。乳房を清潔にすると同時に、乳の出をよくするためにマッサージして暖めるのだ。

そして「マコト君」こと谷崎誠さん(37)たちは、搾乳器を使って乳をしぼる。乳牛一頭から一回の搾乳で一五〜二〇キロの生乳が採れる。朝夕二回の搾乳で三〇〜四〇キロ。「カッチちゃん」こと小野克志さん(37)たちは、二〇リットル缶に入ったしぼりたての生乳を手押し車で次々と工場に運ぶ。

「牧場の仕事は手作業が多いので、知的障害があっても、根気よく練習すればどこか仕事ができるようになります。そ

れで、みんながそれぞれ得意技をもって「いるのです」と、礼子さんは言う。できないと言っただけより、できることを見つけてほめるのである。

工場では、しぼった生乳を消毒がまだ低温殺菌する。摂氏七五度で一五分。さらにこれをホモゲナイザー(均質器)にかけて、乳脂肪球を細かく砕いて脂肪を均質にする。こうしないと、牛乳の脂肪がむらになって、脂肪のかたまりがふたの裏についたりする。

そして最後は、瓶詰め作業である。回収したガラス瓶は洗瓶器で洗浄するが、植村牧場ではその前に、念を入れて瓶を手で下洗いする。牛乳を瓶に詰め、丸いボール紙のふたをするまでの作業は機械



「花の寺、般若寺」門前にある植村牧場

化されているが、そばでだれかが見守っていないとほならない。一部の作業が機械化されても、手作業を大切にしているのが植村牧場の伝統なのだ。

創業は鹿鳴館の時代 突然四代目牧場主に

植村牧場の創業は明治十六年。東京に鹿鳴館が完成したところである。農業を営んでいた礼子さんの曾祖父、植村武治郎さんは体が弱く、みずからの栄養補給のために乳牛を飼った。しかし、しぼった牛乳は家族だけでは飲みきれず、近所にも配ったのが始まりという。

祖父の武一さんは獣医になり、乳牛を増やして本格的に酪農を始める。武一さんはまた、衆議院議員を務め、農業や酪農の振興に尽した。そして父の健次郎さんも獣医になったが、祖父が広げた牧場の製品が次第に乳業メーカーの製品に押され、牧場を維持するのに苦労した。



4代目牧場主として活躍する
黒瀬礼子植村牧場(株)代表取締役

礼子さんは同志社女子大を出て、大阪の建設会社に勤めた。夫の黒瀬晴司さんとは職場で知り合い、晴司さんは今も建設会社に勤めている。しかし、昭和五十七年、父の健次郎さんが脳卒中で倒れ、長女の礼子さんが突然、家業を継ぐことになった。



植村牧場の乳牛にも耳票が付けられている



「キミちゃん」(右)たち牧童の朝は早い。午前4時半には作業が始まる

高校時代から牧場を手伝ってはいたものの、自分で経営するとなると分からないことだらけ。乳牛は子供を産まなければ乳が出ない。種付けから出産までは人間と同様、十月十日だが、一定の乳量を確保するには、いつ種付けをすればいいのか。それさえ分からなかった。

そこで礼子さんは北海道の牧場で三ヵ月半、実習をさせてもらう。二〇人ほどの従業員は年配の人はもちろん、若い人も酪農について実によく勉強している。初めは、女子大出のお嬢さんに何ができるという雰囲気だった。

礼子さんは乳牛のお尻としっぽを洗う作業から始めた。しかし、牛は三〇〇頭もいる。夜は牛のお尻の夢を見た。初めはゴム手袋をはめて作業したが、うまくいかず、素手で作業した。しもやけで赤くはれた手の皮がむけてきた。従業員たちはそれを見て、ようやく酪農の知識を教えてくれるようになった。

実習から戻って礼子さんは、祖父の武一さんに「うちも機械化しよう」と提案した。しかし、武一さんは「北海道の大牧場だから機械化できるが、うちのような規模では、体を使わなアカン」と、取り合ってくれない。

それにしても、もっと人手が必要だと



牛ふんかきなどの作業を進める「カッチャン」こと小野克志さん

職業安定所に求人依頼した。しかし、一般の応募はなく、安定所の職員から知的障害者を一人紹介された。

「牧場の人手が足りないから知的障害者を採用したのでして、初めから福祉のためといった高尚な考えではなかったのです」と、礼子さんは言う。実際、障害者雇用が最初からうまく運んだわけではない。むしろ、苦勞の連続だった。

初の雇用は苦勞続き 体が覚えるまで練習

紹介されたのは、養護学校を卒業して半年ほどの青年だった。牛ふんのかき出しから教えたが、一輪車がうまく操作できない。それではと、牧場の草引きをさせたところ、サツキから松の木まで全部抜いてしまった。やっと植え戻すと、また抜くということを繰り返す。

そこで今度は、牛乳瓶を洗う作業をさせた。ガラス瓶を落として割れたのが面白かったらしく、わざと瓶を投げて割るようになり、何ダースもの瓶を割ってしまう。そのたびに安定所の職員と養護学校の先生が駆けつけて、「もう一回だけ使ってほしい」と懇願される。

青年は二年半、牧場に通ったが、家族



後輩たちも、牛舎での作業に汗を流す

が施設に入所させることに決め、退職した。初めて採用した知的障害者が重度であったため、とまどいもあったのだろうが、礼子さんは「自分の力が足りなかったのではないかと、落ち込んだ」。

そして昭和六十年に、養護学校を出たばかりの「マコト君」と「カッチちゃん」が牧場にやってきた。

初めは一晚だけ牧場に泊まって、いろいろな仕事を試してみる。安定所の職員と養護学校の先生が心配して駆けつけ、付きっきりで作業を教える。それが二泊になり、三泊になり、やがて住み込みで働けるようになった。今では牧場が好きで、家には二週に一度しか帰らない。

牧場に入社する知的障害者は、家族から「使ってくるところは、もうこしかないねんで」と言われてやってくる。彼らはひどく緊張している。礼子さんは「ゆっくり覚えたらええねんで」と、頭でなく、体が覚えるまで繰り返し教える。やがて、失敗しても、「やめへん、がんばる」と言うままでになる。

牛乳配達の泣き笑い 心根やさしい人たち

植村牧場で生産する一日約一、五〇〇本の牛乳は、従業員が手分けして約一、〇〇〇軒のお店や家庭に配達する。名門・奈良ホテルも大切なお客である。

礼子さんは知的障害者にも配達させてみることにした。配達する店や家庭を覚えるだけでなく、入れる本数も一本だったり、二本だったりする。旅行に出るときは「配達を何日まで止めて」と言われることもある。健常者でも間違えやすい複雑な作業である。

礼子さんが「マコト君」をライトバンの助手席に乗せて一緒に回る。松の木のあるこの家は一本、犬のいるこの家は三本、木の門柱のこの家は二本、というふうに教える。

シクラメンの鉢のあるこの家は一本と教えたところ、ある日、その家でシクラメンの鉢を部屋の中に取り入れてしまい、「マコト君」はその家から先が分か



搾乳器を使って乳をしぼる、牧童頭的存在の「マコト君」(谷崎誠さん)



牛舎での作業が一段落すると、牛乳工場の仕事が始まる

らなくなってしまう。以来、動かないものを目印にしたのはもちろんである。こうして数カ月後には「マコト君」は一人で配達に回れるようになった。戸口で待っていて、「ご苦労さん」と牛乳を受け取ってくれる人がいる。月々の牛乳代金を胸のポケットに押し込んでくれる人もいる。

「マコト君」のほうでも、おばあさんがゲームセンターを開店するのを手伝ったり、配達先で話し込んだり、すっかり町の人気者になった。コミュニケーションをしながら配達するので、時間はかかるが、これは仕方がない。

ある日、配達先のお好み焼き店のご主人の姿がみえない。「マコト君」がおか

みさんに「おっちゃんは」と聞くと、「入院したんやわ」と言う。「マコト君」は次の休みの日に、自分の小遣いで奈良名物の三笠まんじゅうを買って見舞いに行った。おかみさんは礼子さんに「自分の子どもでもなかなかできんことなのに」と、涙を浮かべて礼を述べた。「私が風邪を引いたときもパック入りの紅茶やのどあめを買ってきてくれる。学校へ行く子どもの前に立ったり、道でおしっこしたりして、ご近所から注意を受けることもあるけれど、ほんとうに心根のやさしい人たちなのです」と、礼子さんは言う。



瓶詰め作業を手伝う「ヒデキ君」こと田中秀紀さん

御一統さんのお通り 社会貢献で恩がえし

礼子さんの長女恵里さん(23)が中学時代、夜、塾に通うことになった。「ヒデキ君」が「自転車を送って行ってあげる」と言う。午後九時になると、今度は塾に迎えに行く。ほかの従業員も加わって、五、六台の自転車が恵里さんを取り囲むように護衛して帰ってくる。

近所の人たちの間でも「植村牧場の御一統さんのお通りや」と評判になった。「これ、みんなでお食べ」と、お菓子を荷台に入れてくれる人、「これ、たいしてもらいや」と、大根を入れてくれる人もいる。中には「これ、まだ着られるで」と背広とネクタイをくれた人もいて、し



「キミちゃん」こと吉村公嘉さんは、洗瓶作業だ

読売新聞東京本社特別編集委員、よみうりランド副社長。新聞社では論説委員として、医療、福祉、年金など社会保障に関する社説やコラムを担当、大阪本社の編集局長を務めた。現在は、遊園地などの運営にも当たっている。



先日、岡山県の川崎医療福祉大学で、障害者福祉論の特別講義を行い、「自立とは何か」というテーマで、学生たちと障害者の自立について勉強した。日本では安易に「自立」という言葉を使うが、真の意味の「自立」はなかなか理解されていない。障害者自身の「自己決定」を尊重して、肉体的自立だけでなく、精神的自立、社会的自立に向けた意識改革と環境整備が必要というのが結論だ。

ばらくは背広にネクタイ姿で乳しぼりをする従業員もあった。

こうして育った恵里さんは、大阪芸大に在学中は保育所や老人ホームでマリimbaを演奏するなど、自分も何か社会に役立つことをするのだという考えが自然に身に着いたという。

二女の奈津さん(19)も小学校に通っているころ、下校時間に急に雨が降り出し、「マコト君」が傘を持って学校へ迎えに来てくれた。それを奈津さんが「友達に見られて、はずかしかった」と言ったので、礼子さんからバシッとたたかされた。今ではもちろん、奈津さんも障害者と一緒に暮らすことに誇りをもっている。

必要な適度の手作業 定着には理解と努力

民間企業の身体障害者と知的障害者の実雇用率は昨年六月現在、一・四八%と、依然、法定雇用率の一・八%を達成できていない。そうした中で、植村牧場が六五%という驚異的な障害者雇用率を達成しているのは、なぜだろう。

第一に、町の中に牧場という知的障害者が働きやすい環境が残されていたことが挙げられる。牧場は機械化されてはきものの適度に手作業が残されており、障害者はそれぞれ、障害に応じた仕事ができる。しかもその作業は、最終製品に



黒瀬礼子さんの案内で牛舎内を見学する筆者(右)

なるまで見届けられるので、完成の喜びが味わえる。今新たに、これだけの授産施設を作れと言われても、なかなかできないであろう。

第二に、礼子さんを中心に家族や従業員に知的障害者に対する理解があり、家庭的雰囲気の中で働くことができる点である。牧場は仕事場であり、家庭でもあるのだ。また、職業安定所の職員や養護学校の教員の、障害者を職場に定着さ



植村牧場で生産、配達される牛乳

せようと努力、近所の人たちや配達先の人たちの協力も見逃せない。こうした理解と努力が自然な形のノーマライゼーションを実現させたのだろう。

しかし、何よりも、知的障害者自身が失敗にもめげず、何とか得意技を身につけて働こうとする意欲が大きいと思われる。牧歌的雰囲気心地よいこともある。動物好きなこともあるだろう。だが、仕事をしようとする意欲がなければ、これだけ長くは続かない。リーダー格の「マコト君」と「カッチャン」は、この春、実に勤続十九年を迎えたのである。

彼らが懸命に働く姿を見て、取材した記者も「牧童諸氏のがんばりに乾杯」と、お祝いしたい気分だった。